

## 親子の似より（感）の推移について

—女子学生を対象にした4年間—

秋 山 幹 男

On Transition of *Similarity* Perceived between Daughters and their Parents

— Four-Year-Research for Female Students —

Mikio Akiyama

1972年からスタートさせた一連の研究は、1994年に「親子の似より」研究の現状とそのパースペクティブの執筆で一つの区切りがついた。縦断的研究としてデータを収集し、10年単位で比較を繰り返していくと、そこには何か時代の差のようなものが得られるのではないかという単純な動機にもとづく20歳代のアプローチ法は、1972年から1975年にその第Ⅰ次調査をやりとげた。しかし、当時は学生の絶対数が少なかったので、4年間連続して協力してくれた学生は10名であった。この時のデータをあれやこれやと試行錯誤しながらも、いくつかのまとめに持っていったことは懐かしい思い出である。次の第Ⅱ次調査は、10年後の1982年から1985年にかけて実施され、4年間の間に一度以上参加してくれた学生は86名（97.7%）に達したが、4年連続協力者は34名であった。このデータをまとめて発表したのは、1989年の日本心理学会第53回大会であった。その後何度か論文化の挑戦を試みたのだが、膨大な資料をどうコンパクトにまとめたらいいのかについて悩んだあげく、さらに8年の歳月が過ぎ去ってしまった。

初めに調査ありきでスタートさせた、誠に若くて荒っぽい研究法は、その後26年という年月を重ねているうちに、その研究目的は大きく方向性を変えてきた。これまでの論文を読み直してみると、「的」が絞られきれないままかなり表層的な分析結果にもとづいた論文紹介をしてしまったように思う。そこで、とうとう第Ⅲ次調査（1992-1995）は、中止とした。4年間の追跡研究をする意義に疑問を感じたからというよりは、自分の研究パラダイムが大きく変わってきたこと、また、自分なりのキーワードが発見できたということに起因している。1988年に抽出された「親子の似より」という概念は、「親子のズレ」という概念をも掘り起こした。これらは表裏一体の関係にあるとみなすことによって、その裾野が広がり始めた。しかしながらまだ莫として先が見通せない状況にある。4年間の大学生活で、1年次のとき取り出された親子の似より（感）3群が、その後どのように変化していくのかについては、第Ⅱ次調査（1982-1985）のデータを分析検討すればよい。3群34名ならば、それなりに深い突込みも可能に思われる。群間と群内の推移についての研究は、第Ⅱ次調査だけに絞ることにした。1年次の七区分表示で区分③をベースにした親子の似より3群は、その後3年間どのような推移をみせたのか。これをキチッと押さえておけば、これからの一回のみの調査データで他のデータと比較する場合にも、どの程度までの確信を持って追究していけばよいかの一つの目安になると考えている。

1994年には、膨大すぎる資料の一つひとつをどのようにして論文の中に盛り込むかに苦労し

たあげく、急遽前述した現状とそのパースペクティブに切り換え、この論文化は再度保留状態になった。それから1年、資料の再整理に入り、まずは34名以上の協力学生を生かせる方法を模索した。まずその1つとして、1年次と4年次のみを比較を試みた。細かく1年1年を見つめていくことで混乱が生じ、まわりを見えなくさせることもありうると考えたからであった。しかし、それでも自分らしい論文としてまとめあげることができなかった。2年次、3年次といった大学の生活の後4年次に到る。2・3年次を省いて紹介することにまたまた疑問が生じ、とうとう今日まで持ち残してきた。これまでに用いてきた手法にプラスして、新しい工夫もしてみたいし、方法論的にも4年間の流れとして見つめてみたいということで、これまでの集計やグラフ・表を一切見ることなしに、まったく「0」に近いところから取り組み直してみた。パースペクティブでも触れたのだが、発達心理学的な分析だけに留まるのではなく、臨床分野も取り込んだ視点に立ってみたのである。つまり、親子の似より3群のもつ相互の間の統計的な処理による解釈だけでは、説明しきれない異質な存在者（例えば、他の群の特徴を内包しているといったような）を切り捨てずに、論文の中で紹介できるかを考えた。ここに「発達臨床学」の誕生の芽がでたのである。

この論文スタイルは、26年前に行っていたネズミの研究の論文と一脈相通じるところがあった（1971）。全体の大ざっぱな特徴の把握をまず述べた後、群の構成員である個人一人ひとりの把握までも取り上げるようなまとめ方をすることで決心が固まった。七区分表示法という非常に簡便な処理による親子の似より（感）の3群の抽出と、4つの人格特性因子の因子別得点を横並びに見る表記法（自分→母親→父親）との絡みだけではない、新しい工夫も今回試してみた。これは、3つの評定対象とその4因子別得点を一つのスクウェア・グラフに図示化するというものである。1982年から1985年のデータ処理に12年間もかかわり続けた一つの締めは、何としても今回で仕上げておかななくてはならない。

本研究の目的

- ① 1年次に抽出された親子の似より「大」「中」「小」の3群はその後どのような推移をみせていくのか。
- ② 親子の似より3群を構成している34名の一人ひとりの学生達の区分③の推移をみつめる。また、他の性格検査 [MPI：1・3年次、YG 性格検査：2・4年次] との絡みをも追究してみる。
- ③ 認知タイプの抽出をし、3評定対象と4因子のスクウェア・グラフを試みる。

## 方 法

**対象者** 1982年（昭和57年）に入学した本学文学部の学生を対象として、4年間「自分」「母親」「父親」の性格を問う調査用紙と別の性格検査用紙に記入してもらった。4年間のうち1回以上協力してくれた学生は、88名中86名に達したが、4年間連続して協力してくれた者はそのうちの34名（40%）であった。1年次と4年次だけの比較ならば、47名（55%）に分析の対象者が増えるけれども、やはり4年連続の学生について各学年ごとの推移を分析していくことにした。1年次の学生の年齢は18・19歳が中心で、20歳の人も若干含まれていた。彼女らの1年次の両親の年齢をみると、母親は40-44歳が16名、50-54歳が13名、45-49歳の人が5名であった。父親では45-49歳が14名、50-54歳が13名、40-44歳と55-60歳が3名づつであった（父の年齢不明とした者は1人）。きょうだい数は2人きょうだい13名（38.2%）、3人きょうだい17名（50.0%）、1人っ子と4人きょうだいが各々2名づつであった。

- 実施期日** 1年次：1982年(昭和57年)12月中旬調査用紙配布，同年12月25日までに回収。  
 2年次：1983年(昭和58年)12月中旬調査用紙配布，同年12月25日までに回収。  
 3年次：1984年(昭和59年)12月中旬調査用紙配布，同年12月25日までに回収。  
 4年次：1985年(昭和60年)12月中旬調査用紙配布，同年12月25日までに回収。

**実施方法** 「自分」と「母親」「父親」の性格を問う調査用紙と2種類の性格テストのうちいずれか1種類を封筒に入れ，学生に配布。記入が済んだら提出場所を指定して回収させてもらった。ペンネームを使用する。1989年の学会発表会場で一緒に座長をされた下仲氏より，なぜ1種類のテストで通さなかったのかと指摘を受けた。第I次では4年間MPIを同封したのだが，今回は1年と3年ではMPI，2年と4年ではY-G性格検査についてチェックしてもらった。

**調査用紙の内容** ① 尺度評定法による「自分」「母親」「父親」の性格調査 西平(1970)が青年の「自我同一性」の調査用に作成した75項目を56項目にまで絞り込み，これを1985年に3つの評定対象のデータを込みにして，因子分析を試みた。F1 内向性，F2 自己顕示性，F3 誠実性，F4 明朗性の4つの因子の中に42項目が入り，14項目が残ったが，これは「その他」として一括した。4因子とその他の項目内容は，次の通りである。

F1 内向性 (12項目)	F2 自己顕示性 (9項目)	F3 誠実性 (14項目)
しよげやすい	利己的・自己中心的な	礼儀正しい
おく病な	支配欲の強い	ねばり強い
感傷的(オセンチ)な	強がり(の態度をとる)	几帳面な
意志の弱い	うぬぼれの強い	ひたむきな
甘え(た)	ひねくれた	ものを深く考える
ロマンチックな	わがままな	包容力のある
行動力のある(-)	頑固な	正義感の強い
他人を気にする	虚栄心の強い	献身的な
指導力のある(-)	粗暴な	親切な
スケールの大きな(-)		やさしい
内気な(はにかみやの)		なげやりなところのある(-)
服従的な		無責任な(-)
		あきっぱい(-)
		調和のとれた
F4 明朗性 (7項目)	その他 (14項目)	
明るい	(重複負荷)	(毎日の生活に)生き甲斐を感じる
ユーモアのある	しつと深い	素直な
友人の多い(社交的な)	不安定な	ニヒルな(未来に希望や理想のない)
さっぱりした	神経質な(線の細い)	体の強い(たくましい)
冒険好きな	疑い深い(不信の)	独立心の強い
未来に大きな希望をもつ	理想主義的な	宗教的な(敬けん)
孤独な(-)	ヒステリックな	古いものの考え方をする
	趣味の広い	

評定の対象者は，「自分自身」，「母親(自分の)」，「父親(自分の)」の三者についてである。各評定対象ごとに，上記の56の性格項目を用い，5件法でチェックしてもらった。

② モーズレイ性格検査(MPI) 外向性(E)尺度，神経症的傾向(N)尺度とL尺度で

構成されている。最高48点-最低0点。このテストは、1年次と3年次に実施した。

③ Y-G 性格検査 (Y-G) 12の性格特性からなるが、これらは3つの因子：「情緒安定性」(4), 「社会適応性」(3), 「向性」(5) としてまとめられるものである。2年次と4年次に実施した。

データの処理 ① 親子の似より感を3群として取り出すためには、“非常にそう思う” “どちらかといえばそう思う” をまとめて「はい」とし, “どちらかといえばそう思わない” と “全くそう思わない” を合わせて「いいえ」とした。これで三件法の「はい」「?」「いいえ」となる。この中の「はい」と「いいえ」で答えた項目数を七区分の中に入れていき, 区分③での多少で群分けがなされる (七区分表示法の使用)。

② 3つの評定対象についての因子別得点は, 5件法をそのまま使用する (5-1点)。各因子別に加算していく。但し, 性格項目の後ろに (-) がついている項目は, 6-X 変換をおこなう。因子を構成する個数でその合計点を割り, 5.0-1.0の範囲内で得点化することができる。

## 結果と考察

### 1. 各学年ごとに3群を比較すると (平均的データの分析)

図1が七区分表示図である。この中の区分③に入った項目数により, 親子の似より3群は抽出される。1年次の協力者は67名だったので, これを母集団とし学年全体の $\bar{X}$ とSDが算出された。そして, +1SD以上の者を「大」群, +1SD~-1SDに入る学生を「中」群, -1SD以下の値を示した場合を「小」群とした。3年後の4年次まで毎年協力してくれた学生は, このうちの34名 (約半数)。その内訳は, 「大」群11名, 「中」群15名, 「小」群8名となり, 追跡の対象となった。但し, 「小」群に入った1名は, -1SD以下 (7個) ではなかったが, 区分③の個数が8個。「中」群の最低値11個とは差をみせていたので「小」群の中に入れておいた。以後の2年~4年次もこの1年次の群分けをベースとし, 構成員は変えずに学年ごとの分析がなされている。

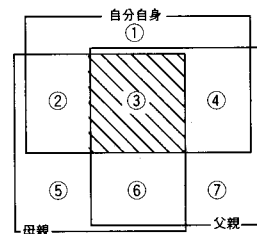


図1 七区分表示図

#### 1-1 1年次の結果について

表1-1は, 「はい」と「いいえ」の性格項目が七区分のどこに入ったかを個数で示したものである。個数は $\bar{X}$ とSDで表している。群分けに用いられたのは, 区分③の個数である。「大」

表1-1 1年次：7区分ごとの項目数の平均とSD/「はい」と「いいえ」の選択数

群	区分	1	2	③	4	5	6	7	はい, いいえ選択数		
									自分	母親	父親
大	$\bar{X}$	8.8	7.4	26.3	6.2	5.5	9.1	7.2	48.6	48.3	48.7
	(SD)	(4.9)	(3.0)	(3.2)	(3.5)	(2.1)	(3.5)	(3.5)	(5.1)	(4.3)	(5.2)
中	$\bar{X}$	11.1	7.9	16.1	9.3	10.9	7.7	11.7	44.3	42.5	44.7
	(SD)	(4.7)	(5.0)	(3.4)	(3.9)	(4.8)	(4.2)	(4.4)	(7.4)	(6.1)	(5.6)
小	$\bar{X}$	19.4	9.1	4.1	8.6	16.3	13.1	10.0	41.3	42.6	35.9
	(SD)	(9.2)	(4.4)	(2.5)	(4.2)	(8.3)	(10.8)	(5.0)	(8.4)	(7.5)	(9.9)
学年全体	$\bar{X}$	12.0	7.9	14.7	7.4	10.2	10.0	10.1	42.5	42.1	42.3
	(SD)	(6.7)	(4.1)	(8.1)	(4.4)	(5.6)	(6.0)	(5.2)	(7.5)	(9.1)	(8.6)

親子の似より(感)の推移について

群は33~23個,「中」群が21~11個,「小」群の個数は8~0個であった。他の区分で有意な差があったのは区分①の(大<小, 中<小)と区分⑤の(大<小)であった。「小」群の場合区分③に入らなかった項目は, 区分①と区分⑤での数を増やすという特色をみせている。検定は, 多重比較(ライアン法)を使用し,  $P<0.05$ に設定した。「はい」と「いいえ」の選択数では, 「父親」においてのみ差をみせている(大>小, 中>小)。

表 1-2 3つの評定対象ごとにみた4つの因子別得点の平均とSD

群	評定対象 因子	自分自身				母 親				父 親			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
大	$\bar{X}$	3.0	2.9	3.7	4.0	2.7	2.3	4.2	3.9	2.0	2.4	4.4	4.1
	(SD)	(0.8)	(0.4)	(0.3)	(0.6)	(0.5)	(0.7)	(0.5)	(0.7)	(0.6)	(0.6)	(0.5)	(0.6)
中	$\bar{X}$	3.3	3.1	3.6	3.7	2.7	2.3	3.9	3.6	2.4	2.8	4.0	3.5
	(SD)	(0.5)	(0.6)	(0.4)	(0.6)	(0.6)	(0.5)	(0.4)	(0.6)	(0.6)	(0.7)	(0.5)	(0.6)
小	$\bar{X}$	3.9	3.7	2.8	3.3	2.6	2.3	3.9	3.4	2.4	2.9	3.6	3.3
	(SD)	(0.4)	(0.6)	(0.6)	(0.6)	(0.5)	(0.6)	(0.5)	(0.5)	(0.6)	(0.9)	(0.6)	(0.5)
学年 全体	$\bar{X}$	3.3	3.1	3.4	3.6	2.6	2.3	4.0	3.6	2.2	2.8	3.9	3.6
	(SD)	(0.7)	(0.7)	(0.5)	(0.7)	(0.6)	(0.7)	(0.5)	(0.7)	(0.6)	(0.7)	(0.6)	(0.7)

※ F1 内向性, F2 自己顕示性, F3 誠実性, F4 明朗性

表 1-2 は, 3つの評定対象ごとに示された4つの因子別得点の平均とSDが載せてある。「自分」と「父親(自分の)」については, 群差が出ており因子によって得点に違いがみられている。しかし, 「母親(自分の)」については, 4つの因子共に有意差はでなかった(この母親の特徴は4年間続いた)。

自分自身について: 似より「大」群と「小」群との間で有意な差をみせたのは, F1~F3。F1 内向性(大<小)では, 「大」群の学生は「小」群の者と比べて内向性は強くない。F2 自己顕示性(大<小)は, 「小」群の方が高い自己顕示性をみせている。F3 誠実性(大>小, 中>小)においては, 「小」群は大や中群の学生に比べ, 自分を誠実ではないと思っている。

父親についての学生の評定: F3誠実性(大>小)とF4明朗性(大>小)で有意な差がでた。「大」群の学生の方が, 「小」群の者と比べて, 父親を誠実で明るいと認知している。

表 1-3 MPI 3尺度の平均とSD

群	尺度	E	N	L
大	$\bar{X}$	37.4	21.2	14.7
	(SD)	(9.9)	(9.3)	(6.4)
中	$\bar{X}$	29.8	20.7	15.1
	(SD)	(10.8)	(9.9)	(6.0)
小	$\bar{X}$	30.0	29.9	9.5
	(SD)	(8.1)	(10.7)	(3.4)
全体 N=34	$\bar{X}$	32.3	23.0	13.7
	(SD)	(10.5)	(10.6)	(6.1)

表 1-3 は, MPI の3尺度の平均とSDを示したものである。1992a年の論文では有意な差がでたのだが, 今回の結果はその時と同じ値ではあったけれど有意差は見られなかった。これは, 群を構成する人数の多少に起因していると思われる(1992a年大群72名, 今回大群11名)。

1-2 2年次の結果について

2年次の協力者は, 60名であった。区分③の平均( $\bar{X}$ )は15.0, +1SDは23.8, -1SDは6.2。「大」群を構成しているメンバーのうち, 3名が24個以下の出現となっている。また, 「中」群では24個以上となっ

た者1名。1年次に「小」群であったが,  $\bar{X}-1SD$ (中の下)の個数に移動した学生が, 5名もでている。移動率(9/34)26.5%。しかし, 七区分表示の3群を構成する学生は, 先にも示したが, 1年の時のままにしている。

表2-1 2年次：7区分ごとの項目数の平均とSD/「はい」と「いいえ」の選択数

群	区分	1	2	③	4	5	6	7	はい、いいえ選択数		
									自分	母親	父親
大	$\bar{X}$	9.6	5.4	27.2	5.7	6.3	9.1	8.0	47.9	47.9	50.0
	(SD)	(4.2)	(3.3)	(8.8)	(2.2)	(2.1)	(4.7)	(3.2)	(4.6)	(4.8)	(6.0)
中	$\bar{X}$	9.3	8.9	16.5	8.3	9.7	7.9	13.9	42.9	42.9	46.5
	(SD)	(3.7)	(5.8)	(3.9)	(4.0)	(5.5)	(3.5)	(5.6)	(7.3)	(7.3)	(4.7)
小	$\bar{X}$	15.3	8.9	7.6	7.9	13.4	12.6	13.0	39.6	42.5	41.1
	(SD)	(9.0)	(3.4)	(3.3)	(4.9)	(6.7)	(10.3)	(5.5)	(8.3)	(6.6)	(9.3)
学年全体	$\bar{X}$	13.2	7.1	15.0	6.9	9.6	10.3	10.9	42.7	42.4	43.2
	(SD)	(6.5)	(5.0)	(8.8)	(3.7)	(5.3)	(6.7)	(5.6)	(7.4)	(8.3)	(9.8)

表2-1をみると、「はい」と「いいえ」の選択数では、父親が（大>小）で差をみせている。群分けに使われた区分③での出現個数は3群に有意差があり、（大>中>小）の順となった。区分③に40個以上の項目を入れた者が大群で2名も出現した。他の区分では、区分⑤（大<小）：母親のみの項目数は、小群の方が多い。1年次ででた区分①の差は、2年次にはみられず、新たに区分⑦（大<中）で差がみられている。

表2-2 3つの評定対象ごとにみた4つの因子別得点の平均とSD

群	評定対象因子	自分自身				母親				父親			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
大	$\bar{X}$	2.7	2.7	3.5	4.0	2.3	2.1	4.1	4.0	1.8	2.6	4.3	4.1
	(SD)	(0.6)	(0.5)	(0.5)	(0.6)	(0.3)	(0.7)	(0.6)	(0.5)	(0.4)	(0.7)	(0.6)	(0.6)
中	$\bar{X}$	3.3	3.1	3.5	3.5	2.8	2.7	3.9	3.6	2.4	2.9	3.9	3.5
	(SD)	(0.6)	(0.8)	(0.4)	(0.6)	(0.6)	(0.5)	(0.3)	(0.6)	(0.5)	(0.5)	(0.4)	(0.5)
小	$\bar{X}$	3.8	3.5	2.9	3.3	2.8	2.3	3.9	3.3	2.4	2.9	3.4	3.1
	(SD)	(0.6)	(0.6)	(0.6)	(0.5)	(0.6)	(0.2)	(0.6)	(0.5)	(0.8)	(0.8)	(0.7)	(0.8)
学年全体	$\bar{X}$	3.0	3.1	3.3	3.6	2.6	2.5	3.9	3.5	2.2	3.0	3.8	3.5
	(SD)	(0.6)	(0.7)	(0.6)	(0.7)	(0.5)	(0.6)	(0.5)	(0.6)	(0.6)	(0.7)	(0.6)	(0.7)

表2-2をみると、「自分自身」についての評価では、F1 内向性にもみ差がみられた（大<小）：大群は小群に比べて内向的ではないという結果は、1年次と同じであった。他の3因子

表2-3 Y-G 3因子の平均とSD/タイプの出現状況

群	尺度タイプ	情緒安定性	社会適応性	向性	タイプ
	(SD)	(15.1)	(6.5)	(19.8)	4 3 1 1 1 1
中	$\bar{X}$	33.2	23.3	61.1	D D' AD B' AB A A' C AC
	(SD)	(12.1)	(6.5)	(14.9)	2 4 2 1 1 2 1 1 1
小	$\bar{X}$	50.6	28.3	50.3	D' B B' A' A' E'
	(SD)	(18.5)	(7.9)	(16.2)	1 1 1 1 1 3
全体 N=34	$\bar{X}$	35.1	24.7	61.1	
	(SD)	(17.4)	(7.2)	(18.3)	

には差がみられない。「父親」については、1年次に引続きF3とF4で大と小群の間に有意な差をみせている。誠実さと明朗さについては、大群の方の父親がいぜんとして高得点をもたらしている。

表2-3は、Y-G性格検査の結果である。1992a年に比べ、人数がはるかに少ない今回ではあるが、「情緒安定性」

因子において差がでた(大<小, 中<小):小群には, 情緒不安定さが出ているといえよう。

1-3 3年次の結果について

3年次の協力者は63名。この学年全体の区分③の平均( $\bar{X}$ )は16.4, +1SDは25.6, -1SDは7.2。+1SD~ $\bar{X}$ (中上)に大群から3名が移動,  $\bar{X}$ ~-1SD(中下)にも1名移動。中群での移動は, +1SD以上が2名, -1SD以下へ2名と4名に移動がみられた。小群では, +1SD~ $\bar{X}$ に1名,  $\bar{X}$ ~-1SDに5名の計6名が-1SD以下より高い個数をみせていた。

表3-1 3年次:7区分ごとの項目数の平均とSD/「はい」と「いいえ」の選択数

群	区分	1	2	③	4	5	6	7	はい, いいえ選択数		
									自分	母親	父親
大	$\bar{X}$	8.0	5.0	28.8	7.3	6.7	7.2	7.5	49.1	47.2	50.8
	(SD)	(5.4)	(3.0)	(7.8)	(4.4)	(3.0)	(4.3)	(3.7)	(4.1)	(7.3)	(3.9)
中	$\bar{X}$	11.3	7.3	16.5	9.5	11.4	8.0	9.6	44.7	43.3	43.6
	(SD)	(3.9)	(4.8)	(8.1)	(5.3)	(5.1)	(3.1)	(3.6)	(5.7)	(5.2)	(8.3)
小	$\bar{X}$	15.6	7.8	11.0	10.5	15.6	12.0	10.4	44.9	46.4	43.9
	(SD)	(8.9)	(4.0)	(3.2)	(6.9)	(7.9)	(9.9)	(5.9)	(6.5)	(8.9)	(9.2)
学年全体	$\bar{X}$	12.9	7.5	16.4	7.3	10.0	9.5	9.8	44.4	43.5	43.2
	(SD)	(7.0)	(4.7)	(9.2)	(4.9)	(5.7)	(6.7)	(4.6)	(7.0)	(8.1)	(9.7)

表3-2 3つの評定対象ごとにみた4つの因子別得点の平均とSD

群	評定対象因子	自分自身				母親				父親			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
大	$\bar{X}$	2.6	3.1	3.8	4.2	2.4	2.6	4.2	3.8	2.0	2.5	4.4	4.2
	(SD)	(0.7)	(0.7)	(0.5)	(0.5)	(0.5)	(1.0)	(0.4)	(0.6)	(0.6)	(0.6)	(0.5)	(0.6)
中	$\bar{X}$	3.2	3.2	3.5	3.7	2.7	2.5	3.9	3.5	2.5	2.8	3.9	3.3
	(SD)	(0.5)	(0.8)	(0.4)	(0.6)	(0.5)	(0.5)	(0.3)	(0.5)	(0.6)	(0.7)	(0.4)	(0.7)
小	$\bar{X}$	3.9	3.3	2.8	3.3	2.6	2.1	3.9	3.3	2.6	2.9	3.4	3.1
	(SD)	(0.3)	(0.5)	(0.4)	(0.6)	(0.5)	(0.4)	(0.6)	(0.4)	(0.7)	(0.9)	(0.8)	(0.8)
学年全体	$\bar{X}$	3.2	3.2	3.4	3.7	2.6	2.5	3.9	3.6	2.3	2.9	3.9	3.5
	(SD)	(0.6)	(0.7)	(0.3)	(0.7)	(0.5)	(0.6)	(0.5)	(0.6)	(0.6)	(0.8)	(0.6)	(0.7)

表3-1をみると, 区分③において大群は, 中群(大>中), 小群との間に(大>小)の差をみせたが, 中群と小群との間の差は消失している。区分⑤は3年次になっても(大<小)で有意な差をみせていた。表3-2をみると「自分自身」のF1内向性では(大<中<小), F3誠実性で(大>小, 中>小), F4明朗性で(大>小)という差がでている。内向的ではなく, 誠実で明朗な「大」群の学生に比べ, 「小」群の者は内向性が強く, 誠実さは低く評価し, 明るくないという自己判断がなされている。「父親」では, 3年続けてF3誠実性(大>小)とF4明朗性(大>中, 大>小)という差がでた。大群の学生が父親を見る目は, 他の2群と比べ, より好意的で温かいといつてよいのではあるまいか。表3-3は, MPIの結果であるが, E尺度においてもN尺度においても差はみられなかった。

表3-3 MPI 3尺度の平均とSD

群	尺度	E	N	L
大	$\bar{X}$	39.8	15.4	15.7
	(SD)	(9.8)	(9.2)	(5.5)
中	$\bar{X}$	33.7	16.7	14.8
	(SD)	(8.8)	(8.2)	(6.0)
小	$\bar{X}$	28.6	24.0	9.5
	(SD)	(9.7)	(13.2)	(1.8)
全体 N=34	$\bar{X}$	34.2	18.0	13.9
	(SD)	(10.1)	(10.5)	(5.7)

1-4 4年次の結果について

4年次の協力者は57名で、これを母集団とした学年全体の区分③の平均 ( $\bar{X}$ ) は18.9, SDは9.1。+1SDは28, -1SDは9とした。大群では +1SD $\sim$  $\bar{X}$  の中に2名,  $\bar{X}\sim$ -1SDに2名が移動している。中群での移動は +1SD以上4名, -1SD以下3名の7名。小群では +1SD $\sim$  $\bar{X}$  に1名,  $\bar{X}\sim$ -1SDに5名の移動。この群からは +1SD以上の値を示す学生は4年間を通して現れなかった。全体の移動率は50.0%, 群別にみた移動率は、大群36.4%, 中群46.7%, 小群75.0%であった。表4-1をみると、区分③で(大>中, 大>小)という差があったが、3年次に引続き(大>中>小)という関係はくずれてしまっている。1年次のまままったく移動せずに4年間を同じ位置で守り通した学生は、大群で5名, 中群6名, 小群では2名の計13名(38.2%)であった。3年間協力してくれた者を加えると人数は増えるのだが、今回は欲張らず4年間通した人のみでまとめておこう。表4-2をみてみよう。「自分自身」ではF1内向性で(大<小), F4明朗性で(大>中)の差をみせた。内向性については、4年連続して大群は小群に比べて内向的ではない状態を維持してきたことになる。「父親」においては、F1内向性で(大<中), F4明朗性で(大>中, 大>小)の差をみせた。父親については、明朗性において小群は、低い値を維持し続けたことになる。1年次で述べたように、「母親」については、4年を通して3群間に差はまったくみられなかったことを改めてここでも記しておきたい。表4-3はY-G性格検査の3群間の結果であるが、人数が少ないため、有意な差は得られなかった。

1989年の学会発表では、この親子の似よりとは違ったまとめ方で発表した。1年次に取り出

表4-1 4年次：7区分ごとの項目数の平均とSD/「はい」と「いいえ」の選択数

群	区分	1	2	③	4	5	6	7	はい, いいえ選択数		
									自分	母親	父親
大	$\bar{X}$	8.7	5.7	27.9	5.4	6.2	9.2	7.1	47.7	49.0	49.5
	(SD)	(4.1)	(3.6)	(8.2)	(2.8)	(3.9)	(4.1)	(3.7)	(6.0)	(6.4)	(5.5)
中	$\bar{X}$	9.5	9.7	19.5	7.8	10.3	6.1	10.7	46.6	45.9	44.1
	(SD)	(4.0)	(6.5)	(8.3)	(4.5)	(4.5)	(2.8)	(6.3)	(6.0)	(6.1)	(7.0)
小	$\bar{X}$	13.0	10.3	13.8	9.8	12.1	10.5	11.6	46.8	46.6	45.6
	(SD)	(7.3)	(5.1)	(4.9)	(5.5)	(5.6)	(8.0)	(5.6)	(8.8)	(8.6)	(10.6)
学年全体	$\bar{X}$	11.5	8.8	18.9	7.4	9.4	7.9	9.9	46.1	45.0	44.1
	(SD)	(5.5)	(5.6)	(9.1)	(4.3)	(5.0)	(4.7)	(5.6)	(7.0)	(8.7)	(8.9)

表4-2 3つの評定対象ごとにみた4つの因子別得点の平均とSD

群	評定対象因子	自分自身				母親				父親			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
大	$\bar{X}$	2.6	2.9	3.7	4.1	2.2	2.5	4.0	4.0	1.9	2.7	4.3	4.1
	(SD)	(0.7)	(0.5)	(0.6)	(0.5)	(0.5)	(1.0)	(0.6)	(0.6)	(0.3)	(0.7)	(0.5)	(0.7)
中	$\bar{X}$	3.2	3.0	3.6	3.5	2.8	2.6	4.0	3.5	2.5	2.8	3.9	3.3
	(SD)	(0.6)	(0.8)	(0.6)	(0.5)	(0.6)	(0.7)	(0.3)	(0.6)	(0.6)	(0.6)	(0.4)	(0.7)
小	$\bar{X}$	3.8	3.0	3.2	3.5	2.8	2.3	3.9	3.4	2.6	3.0	3.7	3.0
	(SD)	(0.4)	(0.4)	(0.3)	(0.5)	(0.5)	(0.3)	(0.4)	(0.3)	(0.7)	(0.8)	(0.6)	(0.9)
学年全体	$\bar{X}$	3.1	3.0	3.5	3.7	2.6	2.4	3.9	3.6	2.3	3.0	3.9	3.6
	(SD)	(0.7)	(0.7)	(0.6)	(0.6)	(0.6)	(0.7)	(0.5)	(0.6)	(0.6)	(0.8)	(0.5)	(0.7)



表 4-3 Y-G 3 因子の平均と SD/タイプの出現状況

群	尺度 タイプ	情 緒 安定性	社 会 適応性	向 性	タ イ プ
大	$\bar{X}$ (SD)	22.7 (12.7)	18.7 (7.2)	73.8 (17.9)	D D' A' 7 2 2
中	$\bar{X}$ (SD)	30.7 (16.3)	18.9 (7.7)	66.5 (17.5)	D D' A' A' B' AB C AC 3 4 1 1 1 3 1 1
小	$\bar{X}$ (SD)	42.3 (18.6)	23.3 (4.9)	56.3 (17.5)	D' B' C' E' 4 2 1 1
全体 N=34	$\bar{X}$ (SD)	30.8 (17.4)	19.9 (7.2)	66.5 (17.0)	

された群は、その後の3年間において少なくとも2/3以上の学生達は、自分の順位をほぼ同じ位置で維持し続けたと結論づけた。この時の群分けは二区分（AB型）、三区分（XYZ型）という少々粗いものであった。今回の親子の似より3群を用いた比較では、1/3強はほぼ同じ状況を維持したが、その他は少なくとも

一度以上は、その位置を上げたり下げたりしていることが分かった。但し、このことは、区分③の変化でみたものである。2・3年では、揺れ動きながらも、4年次で1年次の同じ群に復帰し納まった者は、大群でさらに2名、中群で2名いた（全体の50.0%に相当する）。区分③に入った個数を +1SD 以上、+1SD~ $\bar{X}$ 、 $\bar{X}$ ~-1SD、-1SD 以下の中に置き換えていったので、学会発表とは違いかかなり絞込まれていると思う。

1-5 スピアマンの順位相関係数

区分③の出現項目をもとに4年間の変動度をスピアマンの順位相関係数（ $r_s$ ）でみてみたのが表5である。学年間でかなり高い相関をみせている。1年次と4年次、2年次と3年次では、少し低い値になっているが、表では読み取れないものがその背後に秘められているのかもしれない。平均値とSDをもとに3群について1-1~1-4までの分析結果をみてきたが、この1-5の結果をどのように組み合わせて読み取ればよいのだろうか。一人ひとりの構成員を見ることのできない平均値をベースにした全体的なデータだけから、細かい事実をくみ取ることはやはり難しい。

表 5 区分③の出現数をもとにした  $r_s$

学年	1年	2年	3年
2年	0.74		
3年	0.72	0.63	
4年	0.62	0.71	0.75

2. 個人のデータをどう生かすか（発達臨床学的試み）

2-1 4年間を一まとめにしてみると

区分③をもとに1年次で仕分けられた親子の似より感3群の構成員（大11名、中15名、小8名）は、学年が上がるにつれてどのような変化をみせるのか、または、そうでないのかを表すことに随分と苦労してきたのだが、やっと自分にとって「今、ここで」納得のいく形が見えてきた。この図示は、シロネズミを使った恐れ・不安の消去法の研究（1971）で工夫したのと同じように、34名全員を生かしながら、その変動を見ることができるような表し方である。図2-1は、区分③の出現数を学年ごとの一人ひとりの推移で読み取ることができる。

1年次で決めた親子の似より3群を構成する一人ひとりがいかに変化していったのかを個人別に見ると、1年次に大群に入ったNo.10と11の学生は、4年次で $\bar{X}$ ~-1SDの間に個数が落ち着いた。No.7の学生は、2・3年次で中群の値の中に埋没するが、4年次では再び大群の個数に戻し、定位置を確保している。No.8の学生は、+1SDをはさんで2年次中群の位置、3年次大群の位置、そして4年次中群の位置に移動している。区分③の変化の激しい人である。この図でわかるもう一つの大きな特徴は、1年次「小」群に入った8名の動向であろう。区分③に入る個数は、学年が進むにつれて少しずつ増えていく。-1SD以下の状態を4年間維持

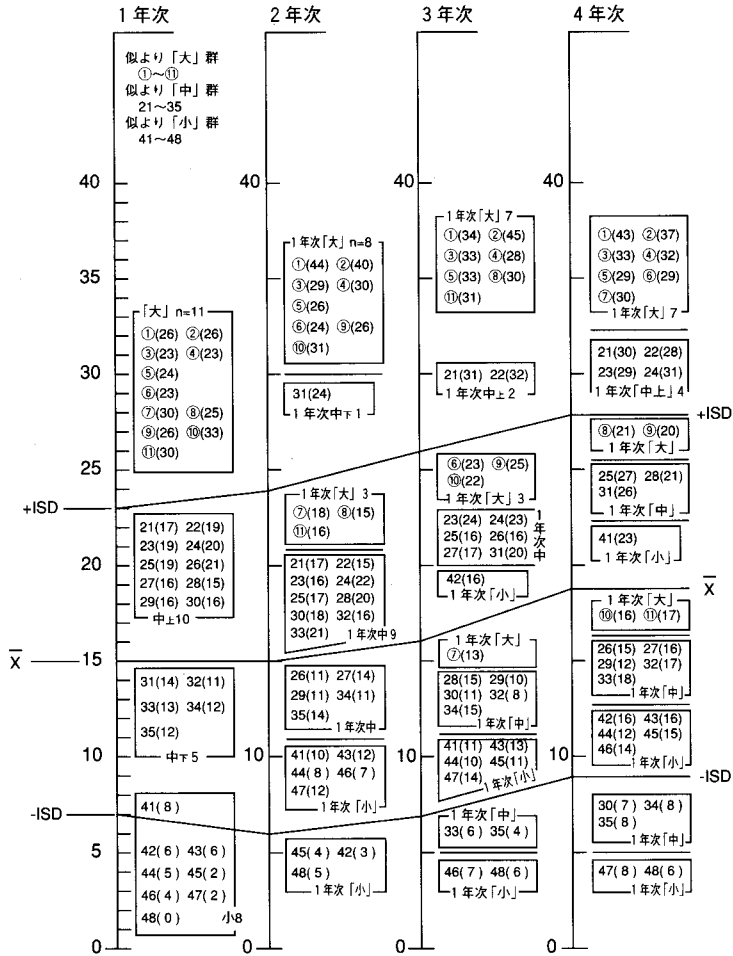


図 2-1 3 群の構成メンバーからみた区分③の出現数の推移

したのは No.48 の学生ただ一人であった。

1 年次に「中」群の学生は、+1SD 以上へ向かう者と、-1SD 以下の方に移動する者とはに分かれている（当然のことかもしれないが）。1 年次に大群を構成していた No.10 と 11 の学生と、小群の No.41 の者が 4 年次に共に中群の中にありながらも、区分③の個数では逆転していたが、大群の 9 名と小群の 7 名は、1 年次から 4 年次まで大きな差を維持し続け、交わることなく終始した。4 年間の大学時代にもいろいろな心の変化があり、苦しい時も楽しいこともあっただろう。また、大なり小なりの決断を強いられたこともあっただろう。心の中に心内化された親子の似より感の高い学生とそれが低かった者とは、この先 60 年以上の自分の人生をどのように作りあげていくのだろうか。図 2-2 は、MPI (1・3 年次) と Y-G (2・4 年次) の結果を図 2-1 の手法でまとめてみたものである。

この図をみると、1 年次では大群に属していた No.11 の学生は、他の者が外向性の高い得点を出しているのに対し、彼女は特に強い内向性をみせていた。この学生は 3 年次で区分③が再び +1SD 以上の個数を示していたが、MPI の E 得点は 22 点と変化していなかった。また、Y-G 性格検査をした 2 年次で E' タイプ、4 年次で A'' タイプを示した。大群を構成する他の

親子の似より (感) の推移について

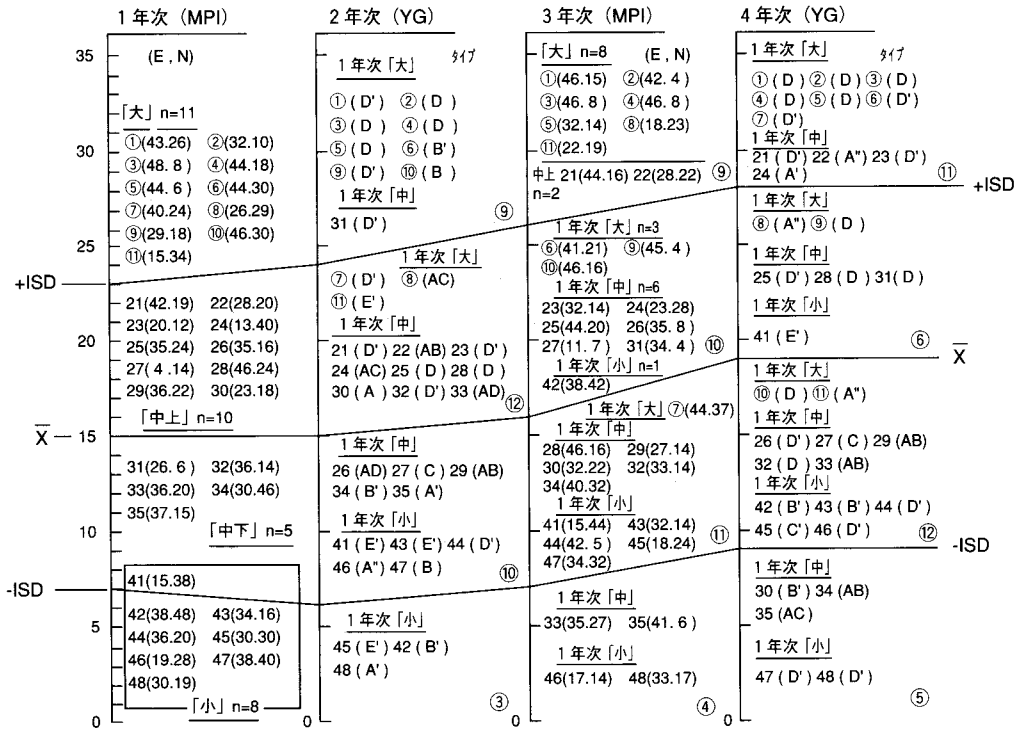


図2-2 3群の構成メンバーからみた2つの性格検査 (1・3年: MPI, 2・4年: Y-G) の推移

メンバーとはかなり異なった意味での親子の似よりをみせた人だったのではあるまいか。小群の中に入れられたNo.41の学生は、No.11 (大群) の人と同じようなE得点 (MPI) だったし、2年次でもE'タイプ (Y-G) 3年次でもE得点は上がらない内向的で神経症的傾向の高い状況 (MPI) であったのに、4年次は、一気に +1SD~ $\bar{X}$  の位置に区分③の個数を増大させている。しかし、彼女のタイプはやはりE' (Y-G)。学年があがるにつれて、好ましい親子関係になっていったというよりは、マイナス的な問題を秘めながら急上昇をみせたといえようか。急減のNo.11の学生と急増のNo.41の学生は、発達臨床学的にみて注目に値する人といえるかもしれない。他にも触れてみたい学生はいるが、ここではこの2名だけに焦点を当ててみた。

2-2 認知タイプ分けの側面から眺めてみると

ここでは区分③以外の6つの区分に入った項目数をも対象にし、それが +1SD以上の値を示した者を抽出した。これをもとに認知タイプを割り出していった。純型と準型それに複合型が出ることも念頭においてまとめたのが表6である。

4年を通して同じ認知タイプを維持するのは難しいものらしい。この表は、単なる項目数でみたものであり、親子研究の一つのヒントにはなるが、直接学生に聞いてみると「そうかな」位の印象でしかないかもしれない。しかし、同じ認知タイプを維持し続ける学生もかなり存在するという事は、七区分表示法がまったく意味がなく、役に立たないということではなくて、より身近なレベルのところでも素直に受け止めてもらえるものになってほしいと、思っている。そのためには、どうしてもこの研究の次の段階である面接法に入っていかなければ、研究者の一人相撲に終わってしまう可能性がでてくる。これでは、狙っている発達臨床学という分野を広げてはいけない。

表6 認知タイプの抽出：各区分 +1SD 以上の値を出した者

認知タイプ	1年	2年	3年	4年	認知タイプ	1年	2年	3年	4年
三者共通型 (区分③) 純型	学生 No.				母子接近型 純型 (区分2・7) 準型 (区分2)	34	34		34
	1	1	1	1		43	43	43	(区分7)
	2	2	2	2		32準			32
	4	4	4	4				35	35準
	5	5	5	5					42
			3	3			7準		
	9	9				8準			
	10	10				33準	33準		
	11		11						48準
				7					
			8			父子接近型 純型 (区分4・5) 準型 (区分4)	30	30	30
		21	21	45	45		45	45	
		22	22	(+区分7)	46		46準	46	
			23				44	44	
			24		25		25	25準	
								33	
父母接近型 純型 (区分1・6) 準型 (区分6)	41	41	41	41	28準	28準	28準	28準	
			6						
				26					
	42		42準		29準	26準	7準		
		21準							
	25準			11準					

複合型

三者共通+父子接近

1	2	3	4
No.31			

三者共通+準母子接近

1	2	3	4
No.8			

母子接近+準父子接近

1	2	3	4
No.34			

三者共通+準父母接近

1	2	3	4
No.6	6		6

三者共通+準父子接近

1	2	3	4
No.3		No.9	

父子接近+準母子接近

1	2	3	4
No.44			

2-3 新しい試み：3評定対象×4因子のスクウェア・グラフの作成

1では各学年ごとに、親子の似より感3群をすべて表の形にしてデータを示した。これは、平均(̄)とSDを使った群全体の傾向をチェックするには役にたったが、学生一人ひとりについて点検をしていく場合、読み取りにくいことはなほだしい。そこで、いろいろ考えていくうちに、3評定対象ごとの4つの因子を同じ土俵にのせて見比べるというアイデアが閃き、34名分すべてについてグラフ化してみた。このスクウェア・グラフを活用すれば、直接自分と両親の関係が比較検討できるのである。表よりははるかに見ることが易しくなった。この方法を紹介する前に、どの因子が三者間で大きな差をみせたかをまず見ておきたい。34名中7名以上の出現をみせた学生の人数をまとめて表7とした。

親子の似より (感) の推移について

表7 スクウェア・グラフからみた因子別での大きな差 (単位 人)

因子	年次差	1年	2年	3年	4年
		F1 内向性	$\bar{S}$ 13	$\bar{F}$ 13	12
F2 自己顕示性	$\bar{S}$ 11	$\bar{M}$ 9	10	7	8
F3 誠実性	$\bar{S}$ 10	$\bar{S}$ 7	$\bar{S}$ 7	$\bar{S}$ 10	$\bar{S}$ 10

Sとは自分自身で、他の評定対象と比べて高い得点であった ( $\bar{S}$ )。

Fとは父親で、他の評定対象に比べて低い得点であった ( $\bar{F}$ )。

Mとは母親で、他の評定対象に比べ低い得点をみせた ( $\bar{M}$ )。F4 明朗性では、合計して2割を越えるような特別の評定対象は存在しなかった。

それでは、2-2の認知タイプで4年連続して純型を維持した学生No.1, 30, 34, 41について3評定対象・4因子のスクウェア・グラフを取り上げてみよう (No.34は3年次に複合型になったのだが紹介させてもらった)。

ついて3評定対象・4因子のスクウェア・グラフを取り上げてみよう (No.34は3年次に複合型になったのだが紹介させてもらった)。

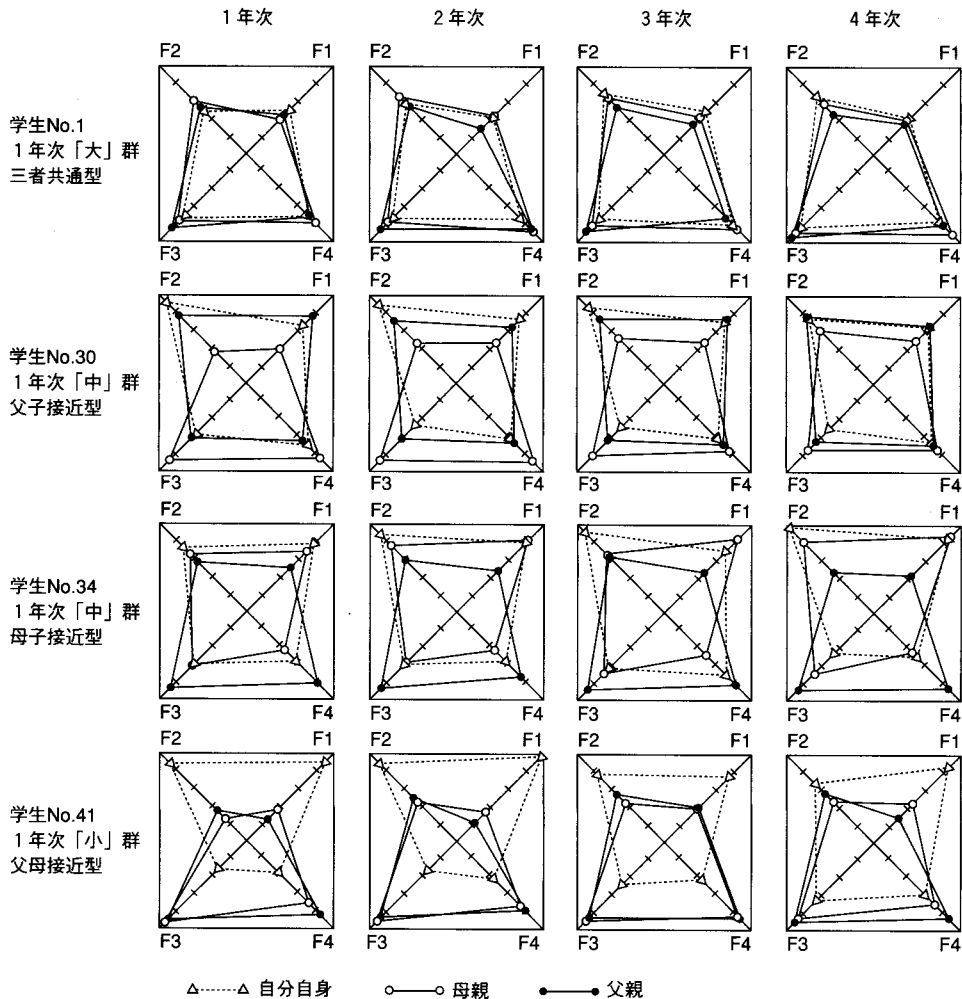


図3 3評定対象・4因子のスクウェア・グラフと認知タイプ (4人の例)

群や認知タイプの違いがくっきりと浮き上がり、それがどのように推移していくかがよく分かる。一人ひとりの特徴をこのようなグラフとしてまとめるやり方は、横一線に計12個の因子別得点を並べた表と比べると、3つの評定対象間の4因子ごとの絡みが分かりやすい。これまで何年かけても手がつけられなかったことを考えれば、これも一歩前進したということになるのであろう（図3）。

早坂泰次郎編著「＜関係性＞の人間学」川島書店 1994 を、平成7年度の前期に大学院の発達心理学特論用のテキストに選んだ。そこで、著者（私）がまとめてきた論文をお送りし、テキスト使用の件とできれば私の研究にたいする批評・指導をお願いした。また、これまでに読んだ先生の本についての思いも書きたした。先生からは、二度も返信があり、2度目の手紙には丁寧なコメントが認められていた（1995.4.22）。

1. 私の研究についてまず指摘を受けたのは、「親子の似より」という言葉（概念）は、学生個人個人の自己評定ないしは記述に因っている。したがって、そこで捉えられている「親子」関係は、一人ひとりの学生の「内なる」関係である。そうであれば、「似より」はむしろ「似より感」とすべきではないかと書かれてあった。それは、「内なる」関係と現実の（——自己を越えた——）関係そのものとは、決して同じではないということであった。

2. 次なる指摘は、関係とはあくまでも二者以上について見られることであり、「内なる」関係だけによって関係を語ることは、van den Berg も批判する「主観主義」ではないかというものであった。この点に関しては Rogers, C. R (1902-1987) も同じあやまちを犯していると言われた。

3. 現実の関係は、きわめて流動的であり、対象化したり、分析したりという伝統的アカデミズムの方法には乗りにくいとも述べてくださった。早坂氏は25年間のグループ体験（IPR トレーニング）からの確信であると記されてあった。

4. 秋山（1992a, b）の考察では、「自分とは一体何者なのか」を考えるにあたって、西平（1986）の論文に着目し、彼の考え方を箇条書にして整理したものが載せられた。早坂氏は、この考えには大賛成とのことであった。

(1.) <私> は他者なしには存在しない。

(2.) <私それ自身が関係である> と言い換えて来たのは、<私> を <関係において> と同時に <プロセスとして> 理解するためだったのだ。

(3.) <私> が可能性であり続けるためには、<私> はどういう在り方をすべきなのか。それは、<私> が自分自身と隙間なく重なり合うという仕方ではなくて、<私> それ自身の中に隙間があり、ズレがあるのでなくてはならないはずである。

(4.) 重要なことは、乗り越えてゆく <私> のみが唯一本物の <私> なのではないという点である。そうではなくて、あくまでこの両方のズレを含んだ <私> が唯一の <私> なのであり、その関係そのものが <私> なのである。

5. こういった自己を捉えるためには、結局のところ上述の流動的グループをどう捉えたらよいかという問いと同じことになる。グループ・ダイナミックスやカウンセリングを含めて、これまでの心理学は、人間関係を機能として抽象的に捉えてきただけで、現実のナマの関係そのものを捉えることには成功してきていないと言われる。

6. 「関係」は「関係性」として捉えるのでなければ、現実的にならないという気づきに25年かかったと述べておられた。

## 親子の似より（感）の推移について

調査法も活用し、一人ひとりと面接しながら、時間をかけ回数を重ねていながら、二人の「関係性」をつくり上げながら、彼女達の「親子の似よりとズレ」について、流動的に捉えていくのがこれからの新しい研究方法だと、早坂氏は私に話されているのではなかろうか。10年以上も経過したデータをあれこれ模索しながらまとめ上げるやり方は、心理学の中でどういう位置を占めるのだろうか。ほとんど注目されることもなく、真実の一つにさえも触れられないまままで終わってしまうのだろうか。いやいや、やっとここまで私は研究を進めてきて、早坂氏のご指摘をいただき、発達臨床学の旗を掲げようとしている。

これは、先輩からいただいた有難い直伝なのではあるまいか。

## 文 献

- 秋山幹男 1971 回避学習における CR と拮抗反応の関係について—先行学習と移行学習の分析より—  
広島大学教育学部紀要第1部 20 197-209
- 秋山幹男 1974 女子学生における自己と父母の認知について 広島文教女子大学研究紀要 VIII 23-38
- 秋山幹男 1980 女子学生における自己と父母の認知について (2) —4年間の縦断的研究— 広島文教女子大学研究紀要 XV 45-74
- 秋山幹男 1981 女子学生における自己と父母の認知について (3) —タイプ分析の試み— 広島文教女子大学紀要 16 61-72
- 秋山幹男・有馬道久 1985 女子学生における自己と父母の認知について (4) —因子別得点をもちいたクラスター分析の試み— 広島文教女子大学紀要 20 57-68
- 秋山幹男 1988 女子学生における自己と父母の認知について (5) —三者間の似よりにもとづく分析— 広島文教女子大学紀要 (人文・社会科学編) 23 83-102
- 秋山幹男 1989 女子学生における自己と父母の認知について (7) —三者間の似よりをもとにした4年間の推移— 日本心理学会第53回大会発表論文集 62
- 秋山幹男 1992a 親子の「似より」と女子学生の性格との関連 広島文教女子大学紀要 27 67-88
- 秋山幹男 1992b 親子の似よりと自己受容について—女子学生における理想自己と現実自己のズレ— 広島文教教育 (広島文教女子大学教育学会) 7 29-48
- 秋山幹男 1994 「親子の似より」研究の現状とそのパースペクティブ 広島文教女子大学紀要 29 145-169
- 西平直喜 1970 新しい存在と価値の発見 津留宏編 青年心理学 有斐閣 133-180
- 西平直 1986 〈私〉をどう理解するか—H. フロンの〈内なる他者〉を手掛かりに— 東京大学教育学部紀要 26 197-205
- 早坂泰次郎編著 1994 〈関係性〉の人間学—良心的エゴイズムの心理— 川島書店

—平成9年9月22日 受理—